

第4回世界創傷治療学会連合会議 (WUWHS2012)

～加温・圧迫を併用した物理療法～ 高齢者の下肢血流低下予防に有用

高齢とともに下肢血流が低下して末梢循環障害を呈することで皮膚脆弱性や下肢機能の低下を来す。星城大学リハビリテーション学部理学療法専攻の林久恵准教授らは、加温・圧迫を併用した物理療法が下肢血流低下予防に有用な方策になるかどうかを検証したところ、「下肢血流の改善ならびに波及効果として健康関連QOLで日常役割機能と活力の向上が認められた」と報告した。

4週間の介入で効果認められる

対象は、2009年9月～11年3月に、下肢の冷えを呈する地域在住高齢者151人のうち除外基準(足部における潰瘍・創傷、治療が必要な血管病変、骨・関節疾患による歩行障害、転倒

リスクが高い)に当てはまらない39人。

過熱水蒸気および間欠的空気圧迫を併用した物理療法(1回につき15分)を週3回実施した群、20分間歩行を週3回実施した群、通常通りの生活の群にランダムに割り付け、4週間の介入後に安静時における足背部皮膚温、足背部における血液分布の変化(以下、血流応答)、QOL、活動量の変化を比較した。なお、血流応答測定はレーザードプラ血液画像化装置、QOL評価はSF-36v2、活動量測定は歩数計を用いた。

その結果、20分間歩行を実施した群と通常生活の群では介入後における血流応答・QOLの変化は見られなかった。それに対し、物理療法を施

行した群では、介入前後における血流応答の変化(Δ Perfusion unit)は60mVから110mVと有意な改善が認められた($P=0.03$)。

また、活動量については全ての群で有意な変化は見られなかったが、健康関連QOLに関しては物理療法を施行した群においては介入後に日常役割機能(身体)と活力の2項目が有意に上昇することが認められた。

林准教授は「加齢に伴う四肢末端の血流低下により呈する冷えや皮膚乾燥などは下肢機能の低下と自覚されにくいのが、重篤な歩行制限を来す末梢循環障害の初期に見られるものであり、要介護要因や脳血管疾患発症のリスクが高い。下肢血流障害の早期発見と、加温・圧迫を併用した物理療法介入が下肢機能の低下を防ぎ、介護予防につながる有用な方策ではないか」と述べた。